

自己の多面性、変動性に関する研究の現状と課題

—測定方法の観点から—

安 達 知 郎

近年、自己の多面性、変動性に関する研究が増えつつある。しかし、各研究で扱われている、自己の多面性、変動性という概念の異同は明らかになっていない。そこで、本研究では、操作的定義、つまり、測定方法の観点から、自己の多面性、変動性に関する研究を展望し、その現状と課題を明らかにすることを目的とした。本研究では、先行研究で用いられた方法を(a)単純な尺度、(b)複数回測定、(c)特殊な方法の3つに大別し、整理した。結果、(a)単純な尺度で測定する方法には、自己安定性尺度(Rosenberg)、自己明確性尺度(Campbell)、自己複数性尺度(Altrocchi & McReynolds)などが含まれた。(b)複数回測定する方法には、教示を変化させた尺度を複数回実施する方法と同一尺度を期間において複数回実施する方法が含まれた。そして、(c)特殊な方法には、自己一貫性測定法(Gergen & Morse)、自己複雑性(Linville)、自己分化度(Donahue et al.)などが含まれた。これらの結果から、先行研究において、自己概念の構造的多面性と内容的変動性の区別、および、自己概念の内容的変動性におけるカテゴリー間での変動とカテゴリー内での変動の区別が十分になされてこなかったことが明らかになった。

キーワード：自己概念、多面性、変動性、操作的定義、測定方法

1. 問題と目的

自己が多面的、変動的なものであるととらえる考え方は、古くからあった。たとえば、哲学者のNietzsche (1878)は“認識を豊かにするには、こうした仕方で自分を画一化するのではなく、さまざまな人生の状態のかすかな声に耳を傾ける方が、もっと高い価値を持つかもしれない。こうした人生の諸状態は、それ固有の見方を随伴させている。だから、ひとは、自分自身を凝固した不変の同じただ一人の個体としては扱わないことによって、多くの人々の生活や本質に対して、認識しつづ関与することになる”(渡邊訳 2005, p.88)と述べている。自己の多面性、変動性を最初に提示した心理学者は、William Jamesである。James (1890)は“人がさまざまな集団に属するように、人にはさまざまな社会的自己(social selves)がある”(p.294)と述べ、自己が社会環境の中で多面的に構成されることを提示した。しかし、その後、自己の多面性、変動性に注目が集まることはなかった。

むしろ、自己の単一性、安定性に注目が集まった (Allport, 1937; Erikson, 1968; Lecky, 1945; Rogers, 1959)。しかし、1970年代ごろから、再び、自己の多面性、変動性に注目が集まりだし、特に1980年代には、自己が認知構造としてとらえられ、その多面性、変動性が積極的に主張されるようになった。それに伴い、自己の多面性、変動性をあらわす概念も数多く提示された。Jones & Gerard (1967)の現象的自己 (phenomenal self)、Kihlstrom & Cantor (1984)の自己の階層 (hierarchy of selves)、Rosenberg (1986)の気圧的自己 (barometric self)と基準的自己 (baseline self)、Markus & Kunda (1986)の作動的自己概念 (working self-concept)、Markus & Nuris (1986)の可能自己 (possible self)、Markus & Wurf (1987)の動的自己概念 (dynamic self-concept)など、例をあげればきりがなし。自己の多面性、変動性をあらわす概念は数多く提示されたが、それらを概念的に区別することは難しい (Campbell, 1990)。そこで、本研究では、自己の多面性、変動性をあらわす諸概念の操作的定義に注目し、測定方法の観点から自己の多面性、変動性に関する先行研究を整理することを目的とする。自己の多面性、変動性がどのように測定されているのかという観点から先行研究を整理することで、自己の多面性、変動性という概念を明確化することができるとともに、今後の実証的研究の示唆を得ることができだろう。¹ただし、本研究では、発達の観点をふくむ、数年の間にみられる長期的な自己概念の変動は取り上げないこととする。本研究では、数分から数日の間にみられる短期的・中期的な自己概念の変動のみをとりあげる。また、本研究では自己概念の評価的側面である、自尊感情の変動についてもとりあげない。

2. 測定方法の概要

自己の変動性を測定する方法は、大きく分けて、(a)単純な尺度、(b)既存尺度による複数回測定、(c)特殊な測定方法の3つに分類される (McReynolds, Altrocchi, & House, 2000)。以下、この分類に従って、自己の多面性、変動性の測定方法を紹介する。

(a)単純な尺度

・自己安定性尺度 (Self-Concept Stability Scale)

自己安定性尺度は、Rosenberg (1965)によって開発された尺度である。自己安定性についての特別な定義などはない。5項目 (オリジナル版では、項目1・2が4件法、項目3~5が2件法。その後の研究では、項目にかかわらず、統一された回答段階が設定されている)からなる尺度である。因子構造は1因子であることが確認されている (Franzoi & Reddish, 1980; 平石, 1990; 小塩, 2001)。妥当性、信頼性に関しては、検討されていない。ただし、Rosenberg (1965)は、この尺度を用いて、自尊感情、心身相関症状数との関連を調べている。そして、自己の安定と自尊感情の間に曲線的関係があること、自己が不安定な人ほど心身相関症状数が多いことを明らかにしている。Rosenberg (1979)は、7項目 (項目1が4件法、項目2が3件法、項目3~7が2件法。ただし、項目5は2つの質問項目のうち、どちらがより自分に当てはまるかを選択する形式)からなる自己安定性尺度も作成している (尺度項目については筆者が日本語訳したものを表1に提示する)。7項目版については、因

子構造、信頼性、妥当性などは明らかになっていない。

5項目版については、平石(1990)、小塩(2001)が日本語版を作成している。主成分分析により、全項目、第1主成分への負荷が高いことは確認されているが、信頼性、妥当性などについては検討されていない。7項目版については、筆者が見た限り、日本語版は作成されていない。

・自己明確性尺度 (Self-Concept Clarity Scale: SCC Scale)

自己明確性 (Self-Concept Clarity) は、Campbell (1990) によって提示された概念である。自己明確性は“個人の自己概念の内容がどれくらい明確に、そして自信をもって定義されているか、どれくらい内的に一貫しているか、どれくらい短期的に安定しているかの程度”(Campbell, Trapnell,

表1 自己安定性尺度(7項目版)の尺度項目

番号	項目内容	逆転項目
1	あなたは本当は自分がどんな人間であるか、どれくらい確信していますか	
2	あなたは自分自身について、そして、本当の自分について、どれくらいの頻度で混乱した感じになりますか	*
3	「私は自分がどんな人間か知っている。そのことに本当に確信がある」と、あなたは感じますか	
4	子どもがあなたに「自分が自分であることを好ましく思う日もあれば、好ましく思わない日もある」と言ったら、あなたの気持ちはそのように変わりますか	*
5	子どもがあなたに「自分が自分であることを幸せに思う日もあれば、不幸せに思う日もある」と言ったら、あなたの気持ちはそのように変わりますか	*
6	自分がどれくらいいい人かということについて、あなたは確信をもってわかりますか、それとも、自分がどれくらいいい人かということについてのあなたの考えは大きく変わりますか	後者選択で*
7	子どもがあなたに「自分があるタイプの人間であると思う日もあれば、全く違うタイプの人間であると思う日もある」と言ったら、あなたの気持ちはそのように変わりますか?	*

*:逆転項目

表2 SCC Scale の尺度項目

番号	項目内容	逆転項目
1	自分自身についての信念は、しばしば互いに矛盾する	*
2	ある日、自分自身についてもった意見が、他の日には異なる	*
3	私は自分が本当はどんな人間なのかを長い時間、悩む	*
4	時々、外に見せている自分と本当は異なると感じる	*
5	私は過去の自分について考えると、自分が本当はどんな人間だったか、自信がない	*
6	私は自分の性格のさまざまな側面について悩んだ体験がほとんどない	
7	時々、私は自分自身のことよりも他人のことをよく知っていると思う	*
8	自分自身についての信念は、とても頻繁に変化する	*
9	もし、私が自分の性格を説明するよう頼まれたら、私の記述はその日、その日で異なるだろう	*
10	たとえ、私が望んだとしても、私は自分が本当は何者であるかを誰かに伝えようとは思わない	*
11	全体的に、私は自分が何者であるかについてははっきりした感覚をもっている	
12	私は自分が望んでいることを本当は知らないから、何かの決心をすることにしばしば困難を感じる	*

*:逆転項目

Heine, Katze, Lavalley, & Lehman, 1996, p.141)と定義されている。自己明確性を測定する尺度が、SCC Scaleである。SCC ScaleはCampbell et al. (1996)によって作成された尺度であり、1因子12項目(5件法)からなる(尺度項目については筆者が日本語訳したものを表2に提示する)。この尺度の α 係数は.86、I-T相関は平均.54、項目間相関は平均.34であり、再検査信頼性係数(5~6ヶ月間隔)は.70~.79である。妥当性については、自尊感情、性格特性、自己意識などとの関連によって、併存的妥当性が確かめられている。また、Campbell (1990)で用いられた自己明確性の指標である、自己評定の2ヶ月間隔での複数回測定(後述)、示された特性語に対する回答パターン(後述)との関連、そして、文化間比較によって、基準関連妥当性が確かめられている。SCC Scaleについては、自尊感情との間に正の相関、神経質、ネガティブ感情、不安などとの間に負の相関が確認されている(Campbell et al., 1996)。

SCC Scaleについては、筆者が見た限り、日本語版は作成されていない。

・自己複数性尺度(Self Pluralism Scale: SPS)

自己複数性(Self-pluralism)は、AltrocchiとMcReynolds(Altrocchi, 1999; Altrocchi & McReynolds, 1997; McReynolds et al., 2000)が解離性同一性障害に着想を得て、提示した概念である。Altrocchi (1999)は、自己複数性を“自分自身は多様であり、時と場合によって反応が異なると感じる程度、あるいは自分自身は統一されていて、状況によらず反応が一貫していると感じる程度”(p.171)と定義している。この自己複数性を測定するための尺度がSPSである。McReynolds et al. (2000)はSPSに関する分析を細かく報告している。それによれば、SPSは1因子で30項目(2件法)からなる(尺度項目については筆者が日本語訳したものを表3に提示する)。 α 係数は.90、再検査信頼性係数(1ヶ月間隔)は.88である。尺度の妥当性は、自己安定性尺度、SCD(後述)、SCC Scale、そして、性格特性、不適応の指標(特性不安、不適応尺度、自我強度)などとの関連によって、確かめられている。自己安定性尺度、SCD(後述)、SCC ScaleとSPS、それぞれの違いに関して、McReynolds et al. (2000)は、以下のように述べている。“自己安定性尺度は自己価値、つまり自尊心に方向づけられている”(p.358-359)。“SCDはSPSよりも狙いが狭い。SCDでは、5つの社会的場面における自己記述に限定されている”(p.359)。“SCC ScaleはSPSに比べ、自己理解への意識により直接的に焦点を当てているように見える”(p.359)。“SPSは特に、自己の側面として、自ら認識している行動変化に焦点を当てている”(p.359)。また、SPSには短縮版のSPS-10もあり、この尺度も内的一貫性、再検査信頼性、妥当性が確かめられている(McReynolds et al., 2000)(尺度項目については表3参照)。SPSについては、不適応との間に正の相関、現実生活における長期間の行動変化(8年間の人生の変化、および体重変化)との間に正の相関、年齢との間に負の相関が確認されている(McReynolds et al., 2000)。

SPSについては、筆者が見た限り、日本語版は作成されていない。

・セルフモニタリング尺度

セルフモニタリング(Self-monitoring)は、Snyder (1974)によって提示された概念である。セルフモニタリングとは、“自己呈示、自己表現行動を観察し、コントロールすること”(p.527)である。

表3 SPS の尺度項目

番号	項 目 内 容	逆転項目	SPS-10
1	私のことをよく知っている人は、私はかなり予測しやすいと思うだろう	*	○
2	私は気分の揺れがかなり大きい		
3	時々、私は自分の感じ方、することに驚く		
4	私は家にいても、仕事中でも、友だちといっても、基本的には同じように行動し、感じる	*	○
5	時々、私は異なる状況で異なる行動をするので、人は私を同じ人間とは思えないだろう		
6	私は状況によっては、普段とは違う行動をする		
7	私は誰と一緒にいるかにかかわらず、同じような人間である	*	○
8	自分のしたこと、自分の行動の仕方を思い出せなかったことが何度かあった		
9	時々、私は2つ(あるいはそれ以上)の人格を持っているように感じる		
10	私は異なる状況で(たとえば、パーティーで、工作中、家で)、異なる行動をするにもかかわらず、いつも自分の内面は同じであると感じる	*	
11	異なるときに、完全に異なる人間であるかのように行動し、感じる時、私はとても快適に暮らしている		○
12	もし、私のことをよく知っている人たちに私のことを尋ねたら、その答えは同じものになるだろう	*	
13	私はほんの少ししか、気分が変わらない	*	
14	私の性格のある面は、他の面とはかなり異なる		
15	私は来る日も来る日も、同じような人間である	*	○
16	私には互いに異なる部分があるので、私はそれらに異なる名前を付けている		
17	私は自分の行動の仕方、感じ方にほとんど、驚いたことがない	*	
18	私は時々、違う人を内面に感じるが、他人にはそういうことを感じない		
19	私のことをよく知っている人は、私の行動が状況に応じて変化すると思うだろう		○
20	誰と一緒にいるか、どんな状況にあるかにかかわらず、私の性格はいつも同じである	*	
21	もし、私が自分自身のことを詳しく記述したら、私は2つ(あるいはそれ以上)の記述を使わなければならないだろう		
22	私のことをよく知っている人は、私は状況によってかなり異なる行動をすると思うだろう		○
23	私は状況によっていくらか変化するにもかかわらず、全体的には私はいつも同じであると感じる	*	○
24	私は2つ(あるいはそれ以上)の異なる性格があって、どんな一場面をとっても、一方の性格かあるいはもう一方の性格である		
25	私は時と場合によらず、ほとんど変化しない	*	
26	時々、私はほかの時の感じ方とはかなり異なる感じを味わうが、全体的には私は同じように感じる	*	
27	自分が昨日と全く異なる人間であるように感じる事が何度かあった		○
28	私のことをよく知っている人は、私は基本的にどんな状況でも同じようにふるまうと思うだろう	*	
29	私は時々、ある人間か、他の人間か、葛藤することがある		○
30	私はその日、その日で、かなり落ち着いて暮らしている	*	

*: 逆転項目 ○: SPS-10の項目

これは、その場に応じて、どの程度、自己呈示を変化させることができるかであり、本研究の対象である、自己の多面性、変動性と関連する概念であると考えられる。セルフモニタリングを測定する尺度も Snyder (1974) によって開発されている。尺度項目は(a)自己呈示の適切性への注意、(b)周りの社会的比較情報への注意、(c)自己呈示の調整能力、(d)自己呈示の調整能力の特定場面における使用、(e)自己呈示の状況間での変動を記述する計25項目(2件法)からなる(因子構造については記述なし)。この尺度の内的一貫性(キューダー・リチャードソン法)は.70、再検査信頼性係数(1カ月間隔)は.83である。尺度の妥当性は、仲間評定、群間比較(役者群、入院患者群)、感情表出・感情判断との関連、社会的比較情報への注意との関連によって、確かめられている。その後、Lennox & Wolfe (1984)は、Snyder (1974)の述べたセルフモニタリングの概念をより適切に測定する尺度(改訂版セルフモニタリング尺度)を開発した。改訂版セルフモニタリング尺度は、自己呈示変容能力(Ability to modify self-presentation) (7項目、6件法)、他者行動への感受性(Sensitivity to expressive behavior of others) (6項目、6件法)という2つの下位因子からなる。 α 係数は.75であり、社会不安、公的自己意識などとの間で併存的妥当性が確かめられている。セルフモニタリング尺度へのこのような批判をうけて、Snyder は自ら、セルフモニタリング尺度を改訂している。Snyder & Gangestad (1986)は、セルフモニタリング尺度の項目の中から、相関が予想される変数との相関が実際に高かった項目だけを選び、1因子18項目(2件法)からなる新たなセルフモニタリング尺度を開発している。この尺度の α 係数は.70で、因子分析の結果、第1因子による分散説明率が62%であることが確認されている。

セルフモニタリングに関連して、Lennox と Wolfe (Lennox & Wolfe, 1984; Wolfe, Lennox & Cutler, 1986)は適切さへの関心尺度(Concern for Appropriateness Scale)も開発している。この尺度は、Snyder (1974)のセルフモニタリング尺度を改訂する中で、セルフモニタリングの理論的定義と適合しない部分から作成された尺度である。この尺度は状況間変動性(Cross-situational variability) (7項目、6件法)、社会的比較情報への注意(Attention to social comparison information) (13項目、6件法)の2つの下位因子からなり、改訂版セルフモニタリング尺度とは対照的に神経質やネガティブ情報への恐怖と正の相関をもつことが明らかにされている(Lennox & Wolfe, 1984)。

日本語版については、Snyder (1974)のセルフモニタリング尺度が岩淵・田中・中里(1982)によって、改訂版セルフモニタリング尺度が石原・水野(1992)、岩淵・水上(2003)、藤岡・高橋(2008)によって、適切さへの関心尺度が岩淵(1996)によって、それぞれ作成されている。

・その他

Markus & Kitayama (1991)によれば、西洋においては社会的文脈から独立した単一的・安定的な相互独立的自己が尊重されるのに対して、東洋においては社会的文脈に依存した柔軟かつ変動的な相互協調的自己が尊重される。このMarkus & Kitayama (1991)の知見に基づいた尺度もいくつか存在する(Gudykunst, Matsumoto, Ting-Toomey, Nishida, Kim, & Heyman, 1996; 木内, 1995; Singelis, 1994; 高田, 1993; 高田・大本・清家, 1996)。たとえば、高田(1993)は、8因子(相互依存性4因子、相互独立性4因子)40項目(相互依存性20項目、相互独立性20項目)(7件法)からな

る相互依存－独立的自己理解尺度を作成している。相互依存性には“相手や状況で態度や行動を変える”“個人では控えめだが、集団では積極的になる”などの項目が、相互独立性には“自分の信じる場所を守り通す”“仲間の望むように振舞うのが大切とは思わぬ”などの項目が含まれている。

また、佐久間(佐久間, 2001; 2002; 佐久間・無藤, 2003)は、人間関係に応じて、どの程度自分が変わるのかについて6段階評定を求め、その評定値を変化程度としている。

(b)複数回測定

質問紙を複数回、配布し、自己の変動性を測定する場合、主に2つの方法がある。ひとつは、質問項目は同じだが教示だけを変えた質問紙を複数回、配布する方法である。もうひとつは、教示も含めて全く同一の質問紙を複数回、配布する方法である。以下、それぞれについて説明する。

・教示を変えた質問紙による複数回測定

自己の変動性を測定するために質問紙の教示を変える場合、そのほとんどが「～のとき、あなたは自分自身をどのようにとらえますか」といった教示の形式になる。「～」の部分には、一緒にいる人(両親、友達、恋人など)、社会的役割(工作中、子どもとして、友だちとして、など)などが入る。よって、この方法によって測定されるのは、関係的自己(関係的自己について、Andersen & Chen (2002)は“自己は、実際あるいは心的に存在している重要な他者との結びつきの中に、部分的に埋め込まれ、そして形作られている。したがって、自己は重要な他者との関係の関数として、変動するかもしれない”(p.619)と説明している)であると考えられる。教示間での評定値のずれをどのように指標化するかはさまざまである。以下、代表的な方法を説明する。

ほとんどの研究で採用されているのが、評定値の関係間での差をとるという方法である(Donahue & Haray, 1998; 榎本, 2002; 福島, 1996; 2003; Sheldon, Ryan, Laird, Rawsthorne, & Hardi, 1997; 吉田・高井, 2008)ⁱⁱ。

差をとる以外に、評定値の関係間での相関をとるという方法もある。ただし、被験者それぞれの自己評定値を求め、その評定値について被験者全体で関係間での相関を求めるという、もっとも単純な方法は先行研究では見られない。先行研究では、もう少し複雑な方法が採用されている。具体的には、Roberts & Donahue (1994)、Donahue & Haray (1998)が、被験者ごとに役割間の相関をとり、その相関係数を被験者間で平均するという方法をとっている。具体的には、Roberts & Donahue (1994)が、以下の手順で自己概念の役割間での変動を検討している。まず、被験者に5つの役割ごとに16個の質問項目への回答を求める。つぎに、被験者ごとに、その16個の質問項目への評定値を変数として、役割間での相関を計算する。さいごに、被験者ごとに求められた相関係数をZ変換し、被験者間で平均する。この方法の場合、被験者ごとに指標を求めることができるというメリットがある。

その他、評定値の関係間での分散をとる方法もある(上出・大坊, 2009)。

これらの研究のほとんどは形容詞、あるいは形容詞対を質問項目として用いているが、記述文を用いている研究もいくつか見られる(Roberts & Donahue, 1994; Donahue & Haray, 1998)。

・同一質問紙による複数回測定

同一の質問紙を複数回、配布する方法では、配布の間に何らかの刺激が被験者に加えられ、自己概念が変動していることを想定する。実験者が刺激を与える場合は測定間隔が短くなり（数分から数時間程度）、日常生活の中での自然な刺激を想定する場合、測定間隔が長くなる（数日から数ヶ月）。複数回測定から得られた評定値群から、どのように指標を求めるかは、教示を変えた質問紙による複数回測定と同様で、評定値の差をとる方法（Campbell, 1990; Kernis & Johnson, 1990; 下斗米, 1988; 鈴木, 1977）、評定値間の相関をとる方法（斉藤, 1978; 1979）がある。これらの研究では、形容詞、あるいは形容詞対が質問項目として用いられている。

・その他

同一人物に対してではないので複数回測定とは言えないが、同一人物に対する複数回測定に近い測定方法もある。それは、実験操作を加えたのち、統制群・実験群それぞれに対して自己概念の評定を求め、実験操作による自己概念の変動を群間比較するという方法である（Fazio, Effrein & Falender, 1981; Tice, 1992）。これらの研究では、形容詞、あるいは形容詞対が質問項目として用いられている。

(c)特殊な方法

・自己一貫性測定法 (The Self-Consistency Measure)

自己一貫性測定法は、Gergen & Morse (1967)が開発した、“自己についての見方が一貫している、あるいは統合されている程度” (p.207) を測定する方法である。具体的手順は以下の通りである。(a)ポジティブな形容詞、ネガティブな形容詞、17個ずつから、自分を最もよく表現している形容詞を、ポジティブ、ネガティブについて、それぞれ5個ずつ選ぶ、(b)選んだ10個の形容詞をコピーし、縦に10個、横に10個、直角になるように並べる、(c)それぞれの形容詞がどれくらい一致しているかを4段階で評定する（45ペア、それぞれについて評定する）、(d)それぞれの評定値を合計する（このとき、ポジティブな形容詞同士、ネガティブな形容詞同士、ポジティブ-ネガティブの組み合わせについて、評定値の合計を出すこともできる）。この指標の再検査信頼性係数（8週間間隔）は.73である（Gergen & Morse, 1967）。この指標については、基準関連妥当性が確かめられている（Gergen & Morse, 1967）。具体的には、理論的に導かれた仮説（自己一貫性が低い人は重要な他者についての評定が一貫していないこと、自己一貫性が低い人は発達過程でさまざまな重要な他者に出会っていること、自己一貫性が低い人は自己評定と重要な他者評定の間の差異が小さいこと）が確認されている。また、Gergen & Morse (1967)は、この指標と不適応との間に正の相関が見られたことを報告している。

日本では、筆者の見た限り、この指標を用いた研究は見られない。

・自己複雑性指標 (Self-Complexity score: SC)

自己複雑性 (Self-Complexity) は、Linville (1985; 1987) によって提起された概念であり、“自己についての知識を認知的にまとめるために使用される観点 (aspect) の数とその観点が相互に関連し

ている度合い、これら2つによって決まる関数”(Linville, 1985, p.97)と定義される。自己複雑性は単純な尺度によっては測定できず、SCによって測定される。SCの導出方法をLinville(1985; 1987)に基づき、説明する。(a)特性語(“ 社交的な ” “ 反抗的な ” など)あるいは役割語(“ 学生 ” “ 恋人 ” “ 娘 ” など)がそれぞれに書かれた33枚のカードを、被験者に配る。このとき、カードに書かれている特性にはネガティブなもの、ポジティブなものどちらも含む。(b)「そのカード群から何枚かを選び出し、自分の一側面を記述するようにグループをつくってください」と被験者に教示する。このとき、グループは自分が満足するまで何グループでもつくっていい。また、同じカードを何回使ってもいいし、使わないカードがあってもいい。(c)それらのグループ分けの結果から、各被験者について、Hを求める。Hは、 $H = \log^2 n - (\sum n_i \log^2 n_i) / n$ という数式に基づいて求める(n : 特性語の総数(33個)、 n_i : グループの組合わせ各パターンに出現する特性語の数)。

SCの信頼性、妥当性については様々な議論がある。Linville(1987)は、2週間間隔でSCを測定し、両者の相関が.70であったことを報告している。この結果は、SCの再検査信頼性を示している結果と解釈できる。また、Linville(1985; 1987)は、自己複雑性について理論的に導かれた仮説をSCを用いて検証している。その結果、自己複雑性が成功、失敗フィードバックによる感情、自己評価の変化に対して緩衝効果を持つこと(Linville(1985)の実験Ⅰ)、自己複雑性が日々の感情変動と関連していること(Linville(1987)の実験Ⅱ)、自己複雑性がストレスの抑うつ・身体症状などへの影響に対して緩衝効果をもつこと(Linville, 1987)が確認されている。また、これらの仮説検証において、SCが他の指標(グループの総数、日常生活における活動数など)よりも、より仮説に合致する結果を導くことも確認されている。この結果は、SCの基準関連妥当性を示している結果と解釈できる。ただし、SCの信頼性、妥当性を肯定する研究(林・堀内, 1997)がある一方で、SCの信頼性、妥当性を否定する研究もある。具体的には、自己複雑性の定義とは異なり、観点間のまとまりとSCとの間に正の相関が見られること(Rafaeli-Mor, Gotlib, & Revelle, 1999)、分類する特性語のプールにどのような内容の特性語を含めるかによってSCの値、他の変数との相関が大きく変化すること(Jordan & Cole, 1996; Morgan & Janoff-Bulman, 1994; Rafaeli-Mor et al., 1999; 佐藤, 1999; Woolfolk, Novalany, Gara, Allen, & Polino, 1995)が明らかにされている。また、そもそも、自己複雑性が精神的健康に寄与するという仮説に疑問を投げかける研究も数多くある(Jordan & Cole, 1996; Morgan & Janoff-Bulman, 1994; Rafaeli-Mor & Steinberg, 2002; Solomon & Haaga, 2003; Woolfolk et al., 1995)。以上のことから総合的に判断すると、SCについて、信頼性、妥当性が確認されているとは言えないだろう。

日本では、林・堀内(1997)、佐藤(1999)がSCを用いた研究を行っている。

・自己分化度(Self-Concept Differentiation: SCD)

自己分化度(Self-Concept Differentiation)は、Block(1961)の役割変動性(role variability)という概念を、Donahue, Robins, Roberts & John(1993)が自己に焦点をあてて、定義しなおした概念である。Donahue et al.(1993)は、自己分化度を“その人にとって重要な役割の間で個人の自己がどれくらい変動的か、あるいは安定的かの程度”(p.834)、“個人の役割に特異的な自己概念がお互い

にどれくらい分化しているか、あるいは統一的な自己に統合されているかの程度” (p.844) と説明している。SCD は、Block (1961) の手順に倣い、以下のように求められる。(a)いくつかの役割を担っている場合を想定し、それぞれの役割について、一般的なパーソナリティテストに回答してもらう (Donahue et al. (1993) の研究 I では、5つの役割、それぞれについて60個の質問項目に回答してもらっている。また、研究 II では、3つ以上の役割、それぞれについて、16個の質問項目に回答してもらっている)。(b)すべての役割における回答を合わせて、役割を変数として主成分分析を行う。(c)主成分分析の第一主成分の分散説明率を100から引く。SCD の信頼性・妥当性は特に検証されていない。ただし、Donahue et al. (1993) が、SCD と感情的適応との間に負の相関があること、役割満足度との間に負の相関があること、学生時代の成績との間に負の相関があること、約30年前・25年前・10年前の感情的適応 (自己評定) との間に負の相関があること、約10年前の感情的適応 (他者評定) との間に負の相関があることを報告している。Donahue et al. (1993) は、SCD と SC の違いについて、測定方法の違いから、SC は “自分自身を解釈する方法の認知的多様性・柔軟性” (p.846)、SCD は “自己概念の断片化、自己概念の調和の欠如” (p.846) と述べている。

筆者が見た限り、日本では、SCD を用いた研究は見られない。

・その他

自己が多面的・変動的ならば、単一的・安定的な自己を想定している従来の自己評定式パーソナリティテストへの回答に何らかの歪みが生じるはずであると考え、パーソナリティテストへの評定から自己の多面性・変動性をあらわす指標を求める試みも見られる (Campbell, 1990; 林・小田, 1996; 桑原, 1985; 森, 1983)。Campbell (1990) は、形容詞対への回答において、自己概念の変動しやすい人は、中心 (「どちらでもない」) に回答が偏ると考え、評定値と中央との差の全項目での平均、評定値間の標準偏差、極値への評定数、回答への自信の全項目での平均を自己明確性の指標としている。森 (1983)、桑原 (1985) は人格の二面性をとらえることを目的として、SD 法を改良し、形容詞対を2つの形容詞に分解して、被験者に回答を求めている。そして、森 (1983) では人格の二面性の指標として、対になる形容詞同士の評定値の差の合計を計算している。また、林・小田 (1996) は、性格特性語の持つ曖昧さに注目して、ファジィ理論に基づき、ビッグファイブの統合度 (伝統的な評定尺度法での平均評定値に対応する指標) と矛盾度 (個人の評定のパターンがどの程度、アンビバレントな状態にあるかを表す指標) を計算している (導出法の詳細については、林・小田 (1996) 参照)。そして、林・小田 (1996) は他者評定に比べ、自己評定の方が矛盾度が高いことを報告している。

その他に、示された特性語が自分に関連するかどうかを瞬間的に判断する課題から自己の変動性の指標を求めている研究もある (Campbell et al., 1996; Markus & Kunda, 1986)。たとえば、Markus & Kunda (1986) は、被験者を2群に分け、それぞれに自らのユニークさを感じさせる操作と自らの平凡さを感じさせる操作を行った。そして、操作後、示された特性語が自分に当てはまるかどうかを評定するという課題への回答を被験者に求めた。その結果、特性語の内容については両群に差は見られなかった。しかし、反応潜時についてはユニーク群はユニークさを示す特性語への Yes 反応 (また、平凡さを示す特性語への No 反応) が早かったのに対して、平凡群は平凡さを示す

特性語への Yes 反応(また、ユニークさを示す特性語への No 反応)が早かった。ここから、Markus & Kunda (1986)は、自己概念の変動は自己記述の内容によっては測定できないが、反応潜時によっては測定できると結論づけた。また Campbell et al. (1996)は、56個の形容詞を被験者に提示し、その形容詞が自らにあてはまるかどうかを Yes/No で判断させた。そして、反対の意味内容をもつ形容詞への回答が矛盾するかどうかを、自己概念の一貫性の指標とした。

また、Campbell (1990)は、普段の自己評定、行動時の自己評定、行動時の自己評定を数日後に想起した場合の自己評定、これら3つの評定値間の差の平均、相関を自己分化度の指標としている。

3. 考察

以上、(a)単純な尺度、(b)複数回測定、(c)特殊な方法の3分類に従い、自己の多面性、変動性の測定方法を概観した。以下、①多面性と変動性の区別、②自己概念の内容についてのカテゴリー間の変動とカテゴリー内の変動の区別、という2点から考察を加える。

まず、①多面性と変動性の区別について述べる。自己の多面性と自己の変動性は異なる概念である。自己の多面性が「自己が認知構造としてどれぐらい多面的か」を問題としているのに対して、自己の変動性は「自己はどれぐらい変動するか」を問題としている。よって、時間的展望を含まず、ある時点で自己がどのように構成されているかを問題としている測定方法は、自己の多面性を測定していると考えられる。一方で、時間的展望を含み、時間変化の中でどのように自己が変動するのかを問題としている測定方法は、自己の変動性を測定していると考えられる。上記した測定方法の中では、(a)単純な尺度による測定方法は、質問項目の中に時間的展望を含む文言(「昨日と今日で自分について考えていることが異なる」「自分についての考えがころころ変わる」など)があり、これらは自己の変動性を測定していると考えられる。(b)複数回測定による測定方法については、教示を変えた質問紙による複数回測定は自己の多面性を測定していると考えられる。なぜならば、教示を変えた質問紙を複数回測定する場合、それは回答時の頭の中にあるさまざまな自己概念を測定していると考えられるからである。また、同一質問紙による複数回測定は自己の変動性を測定していると考えられる。なぜならば、同一質問紙を複数回測定する場合、複数回測定の間になんらかの刺激が被験者に加わることが想定されており、その刺激の結果として、自己概念がどのように変動したかを測定することが意図されているからである。(c)特殊な方法による測定方法は、様々な課題・質問に被験者がその場で回答し、その回答パターンから指標を求めている(実験的介入を加えている Markus & Kunda (1986)、および時間的展望を含む Campbell (1990)は除く)。これは、教示を変えた質問紙による複数回測定と同様に、回答時の頭の中にあるさまざまな自己概念を指標化したものであり、自己の多面性を測定していると考えられる。もちろん、自己の多面性と自己の変動性は関連している。たとえば、自己の多面性を測定する SCD と自己の変動性を測定する SPS との間に有意な正の相関が見られたことが報告されている(McReynolds et al., 2000)。たしかに、「自己概念が多面的な人は、状況に応じて、さまざまな自己概念が賦活され、結果的に自己概念が変動しやすい」という推論は妥当であると考えられる。ⁱⁱⁱしかし、自己概念が多面的でなくても、自己概念が

変動するということはある。たとえば、自分のことを常に外向的か内向的かという視点でとらえる人でも、状況に応じて、自分をすごく外向的と感じたり、内向的と感じたりするであろう。このような人の自己概念は、多面的ではないが、変動的である。今後、自己概念の多面性と変動性の区別を明確にしていく必要があるだろう。

つぎに、②自己概念の内容についてのカテゴリー間の変動とカテゴリー内の変動の区別について述べる。①では、自己概念の多面性と変動性の区別について述べた。このとき、自己概念の多面性は自己概念の構造の問題であり、自己概念の多面性は自己概念の内容の問題である。よって、多面性は構造的な多面性、変動性は内容的な変動性と言い換えることができると考えられる。ここでは、自己概念の内容的な変動性について、さらに考察を深める。自己概念の内容を考える場合、内容がいくつかのカテゴリーに分類されるのか（種類）とそのカテゴリー内で自分自身をどのように認知しているのか（程度）が問題となる。性格認知を例にひくと、まず、人の性格認知が何次元からなるのが重要となる。つぎに、あるカテゴリー、たとえば外向性というカテゴリーでは、自らをどれくらい外向的、あるいは内向的ととらえているかが重要となる。自己概念の内容的な変動性も、このカテゴリー間の変動性とカテゴリー内の変動性という2段階で考えられる。カテゴリー間の変動とは、「自己をとらえる際の視点、カテゴリーがどれくらい変動するか」を問題にする。あるときは外向性カテゴリーを気にするが、あるときは親密性カテゴリーを気にする、そのカテゴリー間での変動を問題にするのである。つまり、カテゴリーの重み付けの問題である。それに対して、カテゴリー内の変動とは、「自己をとらえる際に、あるカテゴリーにおいて、認知がどのように変動するか」を問題にする。あるときは自らをすごく外向的であるととらえるが、あるときは自らをすごく内向的であるととらえる、そのカテゴリー内での認知の程度を問題にするのである。本研究で概観した測定方法を分類する場合、自己の変動性を測定する方法（上記①参照）のうち、(b)同一尺度による複数回測定は、カテゴリー内の変動性を測定していると考えられる。なぜならば、この測定方法を採用している研究のほとんどが、実験操作の内容に対応した尺度を選んでいるからである。たとえば、下斗米（1988）は、外向性に関するフィードバックを被験者に与え、その前後での外向性についての自己認知を測定している。(a)単純な尺度による測定方法は、カテゴリー間の変動とカテゴリー内の変動、どちらを測定しているかを特定することは難しい。それは、被験者がどのように質問項目を理解するかによると考えられる。自己概念の構造、そして内容についてのカテゴリー間の変動、カテゴリー内の変動という区別に基づいて、測定方法を分類した結果を、表4に示す。

表4 自己概念の構造、内容（種類、程度）に基づく測定方法の分類

測定対象		測定方法
自己概念の構造（自己の多面性）		(b)教示を変えた質問紙による複数回測定、(c)特殊な方法による測定
自己概念の内容 （自己の変動性）	カテゴリー間の変動	(a)単純な方法による測定
	カテゴリー内の変動	(a)単純な方法による測定、(b)同一質問紙による複数回測定

以上、①自己概念の多面性(構造)と変動性(内容)の区別、②自己概念の内容についてのカテゴリー間の変動とカテゴリー内の変動の区別について、考察した。自己概念の構造と内容、そして、自己概念の内容についてのカテゴリー間の変動とカテゴリー内の変動を区別するということは重要である。特に、自己概念の内容についてのカテゴリー間の変動とカテゴリー内の変動を区別することは重要である。なぜならば、この区別を考えることで、先にあげた、自己の多面性と変動性の区別をより明確にすることができるからである。この点を、先の例(自分のことを常に外向的か内向的かという視点でとらえる人)に基づいて説明する。この人は自己をとらえる際のカテゴリーが少ないため、自己概念の内容についてのカテゴリー間の変動は起きにくいと考えられる。しかし、自己概念の内容についてのカテゴリー内の変動は起きやすいということはあるうと考えられる。この例からもわかるように、自己概念の多面性と、自己概念の内容についてのカテゴリー間の変動は関連があると考えられる。今後、自己概念の内容についてのカテゴリー間の変動とカテゴリー内の変動を区別することで、自己概念の変動性をより詳細に検討することが可能になるだろう。

4. まとめ

本研究では、操作的定義、つまり、測定方法の観点から、自己の多面性、変動性に関する研究を展望し、その現状と課題を明らかにすることを目的とした。本研究では、先行研究で用いられた方法を単純な尺度、複数回測定、特殊な方法の3つに大別し、整理した。結果、単純な尺度で測定する方法には、自己安定性尺度(Rosenberg, 1965)、自己明確性尺度(Campbell et al., 1996)、自己複数性尺度(Altrocchi & McReynolds, 1997)などが含まれた。複数回測定する方法には、教示を変化させた尺度を複数回実施する方法と同一尺度を期間において複数回実施する方法が含まれた。そして、特殊な方法には、自己一貫性測定法(Gergen & Morse, 1967)、自己複雑性(Linville, 1985)、自己分化度(Donahue et al., 1993)などが含まれた。これらの結果から、先行研究において、自己概念の構造的多面性と内容的変動性の区別、および、自己概念の内容的変動性におけるカテゴリー間での変動とカテゴリー内での変動の区別が十分になされてこなかったことが明らかになった。

自己概念の多面性、変動性については、数多くの測定方法が開発されてきた。これに対して、自尊感情の変動性に関する研究の多くでは、(状態)自尊感情尺度を用いて、状態自尊感情を複数回測定し、そこから変動性の指標を求めるという方法が採用されている(小塩, 2001; 阿部, 2007)。両者の違いは、自尊感情が単一構造であるのに対して、自己概念が多面的構造をもっているためであると考えられる。自己概念は多面的構造をもっているため、上記したような、自己概念の構造と内容の区別、そして、内容についてのカテゴリー間の変動とカテゴリー内の変動の区別が問題となってくるのである。今後、自己の多面性、変動性を研究する際は、自らの研究目的に適した測定方法を選択することが必要となるだろう。

【引用文献】

阿部美帆(2007) 自尊感情の変動性の指標に関する検討 日本社会心理学会第48回大会発表論文集, 84-85.

- Allport, G. W. (1937) *Personality: A psychological interpretation*. Henry Holt.
- Altrocchi, J. (1999) Individual differences in Pluralism in self-structure. In Rowan, J., & Cooper, M. (Ed.) , *The plural self: Multiplicity in everyday life*. Sage, pp.168-182.
- Altrocchi, J., & McReynolds, P. (1997) The self-pluralism scale: A measure of psychologic variability. In Jeor, S. T. (Ed.) , *Obesity Assessment: Tools, Methods, Interpretations*. Chapman & Hall, pp.420-424.
- Anderson, S. M., & Chen, S. (2002) The Relational Self: An Interpersonal Social - Cognitive Theory. *Psychological Review*, 109, 619-645.
- Block, J. (1961) Ego identity, role variability, and adjustment. *Journal of Consulting Psychology*, 25, 392-397.
- Campbell, J. D. (1990) Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 538-549.
- Campbell, J. D., Trapnell, P. D., Heine, S. J., Katz, I. M., Lavalley, L. F. & Lehman, D. R. (1996) Self-concept clarity: Measurement, Personality correlates, and cultural boundaries. *Journal of Personality and Social Psychology*, 70, 141-156.
- Curtis, R. C. (Ed.) (1991) *The Relational Self: Theoretical Convergences in Psychoanalysis and Social Psychology*. The Guilford Press.
- Donahue, E. M., Robins, R. W., Roberts, B. W., & John, O. P. (1993) The divided self: Concurrent and longitudinal effects of psychological adjustment and social roles on self - concept differentiation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 834-846.
- Donahue, E. M., & Haray, K. (1998) The Patterned Inconsistency of Traits: Mapping the Differential Effects of Social Roles on Self-Perceptions of the Big Five. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 24, 610-619.
- 榎本博明 (2002) 自己概念の場面依存性について 大阪大学大学院人間科学研究科紀要 ,28, 97-115.
- Erickson, E. H. (1968) *Identity: Youth and crisis*. W. W. Norton.
- Fazio, R. H., Effrein, E. A. & Falender, V. J. (1981) Self - Perception Following Social Interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 41, 232-242.
- Franzoi, S.L., & Reddish, B.J. (1980) Factor analysis of the stability of self scale. *Psychological Reports*, 47, 1160-1162.
- 藤岡徹・高橋知音 (2008) レノックス&ウォルフ版改訂版セルフモニタリング尺度の改訂 信州大学教育学部紀要 ,120, 71-79.
- 福島治 (1996) 身近な対人関係における自己呈示：望ましい自己イメージの呈示と自尊心及び対人不安の関係 社会心理学研究 ,12, 20-32.
- 福島治 (2003) 自己知識の多面性と対人関係 社会心理学研究 ,18, 67-77.
- Gergen, K. J. & Morse, S. J. (1967) Self - Consistency: Measurement and Validation. *Proceedings 75th Annual Convention APA*, 207-208.
- Gudykunst, W. B., Matsumoto, Y., Ting-Toomey, S., Nishida, T., Kim, K., & Heyman, S. (1996) The influence of cultural individualism-collectivism, self-construals, and individual values on communication styles across cultures. *Human Communication Research*, 22, 510-543.
- Harter, S. (1988) The Construction and Conversation of the Self-James and Cooley Revisited. In Lapsley, D. K., & Power, F. C. (Ed.) , *Self, ego, and identity: Integrative approaches*. Springer, pp.43-70

- 林文俊・堀内孝(1997) 自己認知の複雑性に関する研究－Linvilleの指標をめぐって－ 心理学研究,67,452-457.
- 林文俊・小田哲久(1996) ファジィ理論による性格特性5因子モデル(FFM)の検討 心理学研究,66,401-408.
- 平石賢二(1990) 青年期における自己意識の発達に関する研究(Ⅰ)－自己肯定性次元と自己安定性次元の比較－
名古屋大学教育学部紀要(教育心理学),37,217-234.
- 石原俊一・水野邦夫(1992) 改訂版セルフモニタリング尺度の検討 心理学研究,63,47-50.
- 岩淵千明(1996) 自己表現とパーソナリティ パーソナリティと対人行動 大淵憲一・堀毛一也(編) 対人行動学研究
シリーズ5 パーソナリティと対人行動 誠信書房 pp.53-75.
- 岩淵千明・水上喜美子(2003) 日本語版改訂版セルフモニタリング尺度の検討 日本社会心理学会第44回大会論文
集,742-743.
- 岩淵千明・田中國夫・中里浩明(1982) セルフモニタリング尺度に関する研究 心理学研究,53,54-57.
- James, W. (1890) *Principles of psychology* (Vol. 1). Henry Holt.
- Jones, E. E. & Gerard, H. B. (1967) *Foundations of Social Psychology*. John Wiley & Sons Inc.
- Jordan, A. & Cole, D. A. (1996) Relation of depressive symptoms to the structure of self - knowledge in
childhood. *Journal of abnormal psychology*, 105,530-540.
- 上出寛子・大坊郁夫(2009) 対人的な文脈における自己の多様性と精神的健康の関連 パーソナリティ心理学研
究,17,292-301.
- Kernis, M. H. & Goldman, B. M. (2002) Stability and Variability in Self-Concept and Self-Esteem. In Leary, M. R.,
& Price, J. (Ed.) , *Handbook of self and identity*. The Guilford Press, pp.106-127.
- Kernis, M. H., & Johnson, E. K. (1990) Current and Typical Self - Appraisals: Differential Responsiveness to
Evaluative Feedback and Implications for Emotions. *Journal of Research in Personality*, 24,241-257.
- Kihlstrom, J. F., & Cantor, N. (1984) Mental representations of the self. *Advances in experimental social
psychology*, 17,1-47.
- 木内亜紀(1995) 独立・相互依存的自己理解尺度の作成及び信頼性・妥当性の検討 心理学研究,66,100-106.
- 桑原知子(1985) パーソナリティー測定尺度に関する一研究－SD法との比較による,新しい測定形式の検討－ 心
理学研究,56,79-85.
- Lecky, P. (1945) *Self-consistency: A theory of personality*. Island Press.
- Lennox, R. D., & Wolfe, R. N. (1984) Revision of the self-monitoring scale. *Journal of Personality and Social
Psychology*, 46,1349-1364
- Linville, P. W. (1985) Self-complexity and affective extremity: Don't put all your eggs in one cognitive basket.
Social Cognition,3,94-120.
- Linville, P. W. (1987) Self-complexity as a cognitive buffer against stress-related illness and depression. *Journal of
Personality and Social Psychology*, 52,663-676.
- Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991) Culture and the Self: Implications for Cognition, Emotion, and Motivation.
Psychological Review, 98,224-253.
- Markus, H. & Kunda, Z. (1986) Stability and Malleability of the Self Concept. *Journal of Personality and Social
Psychology*, 51,858-866.
- Markus H., & Nurius, P. (1986) Possible selves. *American Psychologist*, 41,954-969.
- Markus H., & Wurf, E. (1987) The dynamic self - concept: A social psychological perspective. *Annual review of*

- psychology*, 38,299-337.
- McReynolds P., Altrocchi J., & House, C. (2000) Self-Pluralism: Assessment and Relations to Adjustment, Life Changes, and Age. *Journal of Personality*, 68,347-381.
- Morgan A. J., & Janoff-Bulman, R. (1994) Positive and negative self-complexity: Patterns of adjustment following traumatic versus non - traumatic life experiences. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 16,63-85.
- 森知子(1983) 質問紙法による人格の二面性測定の試み 心理学研究 ,54,182-188.
- Nietzsche, F. W. (1878) *Menschliches, Allzumenschliches. Ein Buch fuer freie Geister*. Gruyter.
- (フリードリヒ・ニーチェ 渡邊二郎(編)(2005) ニーチェ・セレクション 平凡社)
- 小塩真司(2001) 自己愛傾向が自己像の不安定性, 自尊感情のレベルおよび変動性に及ぼす影響 性格心理学研究 ,10,35-44.
- Rafaeli-Mor, E., Gotlib, I.H., & Revelle, W. (1999) The meaning and measurement of self-complexity. *Personality and Individual Differences*, 27,341-356.
- Rafaeli-Mor, E., & Steinberg, J. (2002) Self complexity and well-being: A review and research synthesis. *Personality & Social Psychology Review*, 6,31-58.
- Roberts, B. W., & Donahue, E. W. (1994) One personality, multiple selves: Integrating personality and social roles. *Journal of Personality*, 62,199 – 218.
- Rogers, C. R. (1959) A theory of therapy, personality, and interpersonal relationships as developed in the client-centered framework. *Psychology: A study of a science*, 3,184-256.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton.
- Rosenberg, M. (1979) *Conceiving the Self*. Basic Books.
- Rosenberg, M. (1986) Self-Concept From Middle Childhood Through Adolescence. *Psychological Perspectives on the Self*, 3,107-136.
- 佐久間路子(2000) 多面的自己－関係性に着目して－ お茶の水女子大学人文科学紀要 ,53,435-451.
- 佐久間路子(2001) 大学生における関係的自己の可変性の理解－変化理由と変化意識に着目して－ 人間文化論業 ,4,85-94.
- 佐久間路子(2002) 関係的自己の可変性の理解：大学生と主婦の比較 お茶の水女子大学人文科学紀要 ,55,307-317.
- 佐久間路子・無藤隆(2003) 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究 ,51,33-42.
- 斉藤耕二(1978) パーソナリティ判断尺度の信頼性－自己のパーソナリティについての判断の安定性－ 東京学芸大学紀要1部門 ,29,142-146.
- 斉藤耕二(1979) パーソナリティ判断の実験的研究(3)－パーソナリティ判断の安定性－東京学芸大学紀要1部門 ,30,81-83.
- 佐藤徳(1999) 自己表象の複雑性が抑鬱及びライフイベントに対する情緒反応に及ぼす緩衝効果について 教育心理学研究 ,47,131-140.
- Sheldon, K. M., Ryan, R. M., Rawsthorne, R. M., & Ilardi, B. (1997) Trait self and true self: Cross - role variation in the big - five personality traits and its relations with psychological authenticity and subjective well - being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73,1380-1393.
- 下斗米淳(1988) 社会的フィードバックが受け手の自己概念変容に及ぼす効果－送り手についての受け手の認知が果たす役割－ 心理学研究 ,59,164-171.

- Singelis, T. M. (1994) The measurement of independent and interdependent self-construal. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 20, 580-591.
- Snyder, M. (1974) Self-Monitoring of expressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 30,526-537.
- Snyder, M., & Gangestad, S. (1986) On the nature of self-monitoring: Matters of assessment, matters of validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51,125-139.
- Solomon, A., & Haaga, D.A.F. (2003) Reconsideration of self-complexity as a buffer against depression. *Cognitive Therapy and Research*, 27,579-591.
- 鈴木百合子(1977) 自己概念の維持に関する実験的研究 日本心理学会第41回大会発表論文集,1122-1123.
- 高田利武(1993) 青年の自己概念形成と社会的比較－日本人大学生にみられる特徴－ 教育心理学研究,41,339-348.
- 高田利武・大本美千恵・清家美紀(1996) 相互独立的－相互協調的自己観尺度(改訂版)の作成 奈良大学紀要,24,157-273.
- Tice, D. M. (1992) Self - Concept Change and Self Presentation: The Looking Glass Self is also a Magnifying Glass. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63,435-451.
- Wolfe, R.,N., Lennox, R.,D., & Cutler, B.L. (1986) Getting along and getting ahead: Empirical support for a theory of protective and acquisitive self-presentation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50,356-361.
- Woolfolk, R. L., Novalany, J., Gara, M. A., Alklen, L. A., & Polino, M. (1995) Self-complexity, self-evaluation, and depression: An examination of form and content within the self-schema. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68,1108-1120.
- 吉田琢哉・高井次郎(2008) 期待に応じた自己認知の変容と精神的健康との関連：自己概念の分化モデル再考 実験社会心理学研究,47,118-133.

【註】

- i 測定方法以外の観点からの整理は、Anderson & Chen (2002)、Harter (1988)、Kernis & Goldman (2002)、佐久間 (2000)などを参照。
- ii t検定、分散分析などを用いて関係間の自己概念の差を検討している研究も、指標として評定値間の差を採用していると考えられる。
- iii これは逆の説明も可能である。つまり、自己概念が変動しやすい人は、状況に応じてさまざまな自己を演じるため、それが内在化され、結果的に自己概念が多面的になるとも説明できる。自己の多面性と自己の変動性の因果関係については、さらなる検討が必要である。

A review of researches on Self-multiplicity and Self-variability

—from the viewpoint of measurement—

Tomoo ADACHI

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

In recent years, researches on Self-multiplicity and Self-variability have been increasing. But the concepts of Self-multiplicity and Self-variability are obscure. The purpose of this study was to review researches on Self-multiplicity and Self-variability from the viewpoint of operational definition. In this study, the measurements used in precedence researches were classified into three categories; (a) simple scales, (b) plural measurement, (c) elaborate methods. Self-Concept Stability Scale (Rosenberg) , Self-Concept Clarity Scale (Campbell) and Self Pluralism Scale (Altrocchi & McReynolds) were classified into (a) simple scales. Plural measurement at the same time by slightly changed scales and plural measurement at regular intervals by a same scale were classified into (b) plural measurement. And The Self-Consistency Measure (Gergen & Morse) , Self-Complexity score (Linville) and Self-Concept Differentiation (Donahue et al.) were classified into (c) elaborate methods. As a result, it was clarified that the distinction between structural multiplicity and content variability, the distinction between variability among content categories of Self-Concept and variability in content categories of Self-Concept were important.

Keyword : Self-Concept, multiplicity, variability, operational definition, measurement